様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３４５１７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３８１２３９

研究課題名（和文）生活科において歴史教育の視点から社会認識の基礎を育成するスタンダード開発研究

研究課題名（英文）Research into the development of standards to lay the foundations of historical consciousness in Life Environment Studies

研究代表者
酒井　達哉（SAKAI, TATSUYA）

武庫川女子大学・文学部・講師

研究者番号：１０６３８０５０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、ドイツの事実教授教科書における時間学習に関する単元の分析に基づいて、歴史意識の基礎を育成する生活科授業開発を行うことである。そのために、まず、生活科において歴史意識をどのように育成すべきかを、次に時間意識の育成のためのドイツ及び日本の教科書の内容構成について考察した。それをもとに生活科における時間学習の授業を学校の今と昔に着目して開発し、実際に公立小学校で実施し、授業分析を行った。その授業を歴史意識の基礎を育成するという視点から評価し、生活科における歴史意識の基礎を育成する授業の在り方を究明することを試みた。

研究成果の概要（英文）：This study aims to develop Life Environment Studies lessons that lay the foundation for historical consciousness, based on analysis of units relating to time learning in Personal Social Education textbooks in Germany. To achieve this, we first examine how best to foster historical consciousness in Life Environment Studies and then the composition of content in German and Japanese textbooks aimed at fostering time perception. Based on this research, time learning lessons for use in Life Environment Studies focusing on the present and past of the school were developed, implemented in practice in a public elementary school, and analyzed. The lessons were evaluated from the viewpoint of laying the foundation for historical consciousness, and an attempt was made to determine the nature of lessons that successfully lay the foundation for historical consciousness in Life Environment Studies.

研究分野：生活科教育学

キーワード：歴史意識　事実教授　生活科授業開発　学校の今と昔　時間学習

１．研究開始当初の背景

生活科においては創設当初から「学習活動が体験で終わり、活動を通して得た気づきを質的に高める指導がなされない」「思考を踏まえた上での表現になっていない」「科学的見方・考え方の基礎を養う指導が充実していない」「科学的見方・考え方の基礎を養う指導が充実していない」といった課題が指摘されてきた（中野重人『生活科教育の理論と方法』東洋館出版社、1992 年等）。

これらの課題を克服するために、今日まで多くの実践事例が蓄積されている（和田信行『新学習指導要領を生かした「生活科」「総合」の授業づくり 課題を解決する実践事例集 教育技術 MOOK』小学館、2008 年等）。しかし、これらの実践事例の多くは「地域と生活」、「動植物の飼育・栽培」、「季節とのふれあい」等のテーマから読み取れるように、子どもと生活界との関連を重視し、後続する教科の知識体系との関連については十分な考慮をしないため、生活科の課題を克服できないという現状にある。

一方、日本の生活科に相当するドイツの事実教授では、カリキュラムレベルで子どもと生活界と後続する教科の知識体系を関連づけた学習を構想し、この関連の枠組みのもとで育成する資質・能力をコンピテンシーとして明示し、その育成を保証するための評価体系を組織している（原田信之「ドイツの統合教科「事実教授」のカリキュラムとコンピテンシー－ハンブルク州 2010 年版基礎学校学習指導要領の検討－」『岐阜大学教育学部研究報告　人文科学』第 59 巻第１号、2010 年、pp.269-280）。また、近年の事実教授の傾向として、子どもの生活現実の解明のために事実教授における歴史学習の重要性が再認識されるようになっている。例えば、Kerstin Michalik (Hrsg.): Geschichtsbezogenes Lernen im Sachunterricht. Westermann Verlag 2004 、Dietmar von Reeken: Historisches Lernen im Sachunterricht. Schneider Verlag 2011 などが相次いで刊行されている。これらは、歴史学習の観点から事実教授におけるコンピテンシーの育成を実現しようとするものである。

本研究は、コンピテンシーの育成・評価を実現するドイツの事実教授と日本の生活科の比較考察を通して、歴史コンピテンシーに着目した生活科教育スタンダードを開発するための基礎的研究を実施することで、生活科が抱える課題を克服し、生活科教育研究の新たな発展を図ろうとするものである。日本と異なる構成論理を持つドイツの事実教授のカリキュラム及び実践事例から日本の生活科教育研究への有益な示唆を得ることができ、日本の生活科教育研究の閉塞状況を打開する新しい展望を開く研究になると考えたことが、本研究を構想した経緯である。

２．研究の目的

本研究の目的は、歴史コンピテンシーに着目した生活科教育スタンダードを開発するための基礎的研究として、ドイツの事実教授教科書の時間学習に関する単元の分析を基にして、歴史意識の基礎を育成する生活科授業を開発することである。

本研究が歴史意識の基礎を育成する生活科授業に着目するのは、生活科では中学年以降の社会科との接続、初等段階と中等段階の接続が十分考慮されていないという問題意識を持っているからである。現行（2008 年改訂版）の生活科の教育課程の基準（学習指導要領）では中学年以降の理科との接続を視野に入れた科学的な見方・考え方の基礎の育成は目指されたが、社会科へと接続する見方・考え方に関しては明記されなかった。

この現状は当然の帰結として生活科と社会科を乖離させるとともに、初等段階と中等段階の接続も困難にさせる。社会的な見方・考え方は、初等段階の生活科と社会科、中等段階の社会科と連続させて、累積的に能力形成するべきである。

本研究では、これら２つの接続に関する課題を克服する方策として、歴史意識を設定する。歴史意識を設定する理由は２点ある。第１は、歴史意識は中学年以降の社会科との接続を可能にするからである。生活科では主として時間学習という形で、直線的な時間経過、周期的な時間的経過、時間的変動といった多様な時間的経過や事象の推移を把握することにより、過去・現在・未来を結びつけ、今後の展望の獲得を可能とする歴史意識の中でも、とりわけ時間意識の育成が図られる。時間意識の醸成は低年齢期らしい学びを阻害することなく可能であり、生活科で育成した時間意識は、中学年以降の社会科で育成する歴史意識の基盤として機能するのである。第２は、初等段階と中等段階の接続を可能にするからである。歴史意識は初等段階と中等段階を通して育成が図られるため、歴史意識を中核に据えることで両段階の接続が可能になるのである。以上２点の理由から、本研究では、歴史意識の基礎としての時間意識の育成を図る生活科授業を開発することで、生活科と社会科、初等段階と中等段階を接続する方策を提示することをめざした。

３．研究の方法

この研究目的を達成するために、本研究期間の１・２年次（平成 26・27 年度）は日本の旧低学年社会科及び生活科とドイツの事実教授における歴史学習の調査を、３年次（平成 28 年度）は歴史意識の基礎を育成する生活科授業を開発することとした。本研究では研究の確実な遂行のために研究代表者、研究分担者、研究協力者からなる研究体制を組織した。特に、研究協力者には事実教授や歴史教育を専門領域とするドイツの研究者並びに研究者と親交の深い基礎学校教師を人選し、研究体制の充実を図った。

４．研究成果

（１）研究の特質と意義

生活科教育研究では、生活科成立当初からの課題の克服を図り、実践事例研究を蓄積してきているが、未だに本研究で問題提起した課題を克服する研究はほとんどみられない。本研究は次のような特色・独創性及び意義を通して、生活科をめぐる現状の打開を試みた。

① 生活科の比較対象としてドイツの事実教授を取り上げることで、生活科教育研究の新しい視座を提案できる。ドイツ事実教授をフィールドとする研究者は、理論レベルで事実教授が持つ生活科への有効性・適用可能性を主張してきたが、実践事例という実践レベルでその有効性・適用可能性を実証する研究はみられない。本研究は、生活科教育研究における海外研究分野の実践レベルでの新たな活用を実現するものである。

② 本研究は、社会認識の基礎としての歴史コンピテンシーに着目している。生活科において歴史学習はこれまでテーマとして扱われることがなかった。研究代表者は長年、小学校の教育現場において単元指導計画の開発に取り組み、大学院においてその実践開発を、また、研究分担者はドイツ及び日本の歴史教育や、ドイツ事実教授及び生活科を研究対象としてきていることから、研究代表者及び研究分担者の共同研究は創設の趣旨を前提としてきた生活科教育研究の転換を図ろうとするものである。歴史学習に着目することで、次の２点の生活科教育研究の課題が克服できると考えた。

［課題ア］　子どもと生活界と後続する教科の知識体系とが結びつかない。
ドイツの事実教授では歴史学習の視点から子どもの生活現実の解明を図ることで、子どもと生活界と後続する教科の知識体系を関連づけており、日本の生活科にも適用可能であろう。

［課題イ］　現行の生活科学習指導要領では中学年以降の理科との接続を視野に入れた科学的な見方・考え方の基礎の育成をめざしているが、中学年以降の社会科学習との接続は十分に考慮されていない。歴史学習の視点からドイツの事実教授を通して生活科と社会科の接続モデルが得られる。

③ 上記（１）～（２)の意義を持つ本研究は、生活科の課題を克服する生活科教育研究の新たな発展を促すとともに、次回の指導要領の改訂を含めた生活科カリキュラムや授業開発のための基盤研究となりうるものである。

（２）研究の経過

本研究においては、以下のような３ヶ年の研究を実施した。

平成 26 年度に実施した具体的内容は以下の通りである。まず、生活科における歴史学習の調査研究(Ⅰ)として、旧低学年社会科や生活科の歴史学習に関連したカリキュラム、教科書、実践例等を収集し、比較分析の対象とできるようその教科内容について整理し、生活科教育スタンダード試案開発のための基礎的情報とした。次に、事実教授における歴史学習の調査研究(Ⅰ)として、第１に、事実教授における歴史学習の重要性の根拠となる文献、ドイツ事実教授学会作成の学会版事実教授スタンダード、バイエルン州等の事実教授の指導要領、教科書を分析した。第２に、事実教授における歴史学習の重要性を主張する事実教授学者、事実教授と歴史科の接続の重要性を主張する歴史教授学者の協力を受け、事実教授で学習する歴史的内容は中等以降の歴史科の歴史的内容とどのように接続しているのか、子どもと生活界と後続する教科の知識体系をどのように関連づけ、どのようなコンピテンシーを育成しようとしているのかを考察した。これら２つの調査を通して、事実教授における歴史学習を理論レベルで解明することを試みた。

次に、平成 27 年度に実施した内容は以下の通りである。まず、事実教授における歴史学習の調査研究(Ⅱ)として、事実教授における歴史学習の調査研究(Ⅰ)の調査結果を踏まえた上で、実際の授業では子どもと生活界と後続する教科の知識体系の三者をどのように関連づけているか、コンピテンシーをどのように評価しているのかを分析した。ここでは、事実教授における歴史学習を実践レベルで解明することを試みた。さらに、生活科における歴史学習の調査研究(Ⅱ)として、第１に、事実教授における歴史学習と旧低学年社会科及び生活科における歴史学習の比較分析を行い、生活科ではどのような歴史学習を実施すれば、中学年以降の社会科での歴史学習と接続できるのか、子どもと生活界と後続する教科の知識体系を関連づけることができるのかを考察した。第２に、第１の考察を踏まえ、生活科における歴史学習ではどのようなコンピテンシーを育成すべきであるのかを考察し、た。これら２つの考察を通して、生活科における歴史学習を理論レベルで明らかにした。

平成 28 年度は、これまでの研究を総括し、ドイツ事実教授における第１・２学年の時間学習の単元構成を分析し、その時間学習ではどのように時間意識を形成しているかを明確にすることで、歴史意識の基礎を育成する生活科授業を開発するための示唆を得、それをもとに実際に時間意識を形成する生活科授業を開発した。

（３）研究成果

本研究の目的は、ドイツの事実教授教科書における時間学習に関する単元の分析をもとにして、歴史意識の基礎を育成する生活科授業開発を行うことであった。そのために、生活科において歴史意識をどのように育成すべきかを考察した上で、時間意識の育成という観点からドイツ及び日本の教科書の内

容構成を分析した。その分析を踏まえ、学校の今と昔に着目した時間学習に関する生活科授業を開発し、実際に公立小学校で実施し、授業分析を行った。開発した授業は公立小学校第２学年（児童数 16 人）を対象に研究代表者が実施し、その授業記録をまとめた。本授業では、歴史的次元では時間意識や歴史性の意識を、社会的次元ではアイデンティティの意識の育成を目指し、授業のねらいを「創立記念日との関連から自分の小学校の歴史に興味を持つことができ、今と昔の小学校の様子や生活の比較において継続と変動があることに気付き、時間意識を育成する」と設定して、以下の学習活動を展開した。

① Ｆ校の創立からの歴史の長さを表したシンボルツリーである桜の年輪を時間軸として見て、学校の創立がどのくらい前なのかを理解する。
② 昔と今の学校の写真を比べ、気付いたことを発表する。
（ｉ） 線路から見た学校の遠景と桜の木（桜の木の成長と学校の変動）
（ii） 教室の学習風景（継続と変動）
③ 昔の学校の様子を知る方のインタビュー映像を見て、感想を述べる（文書、写真・絵、時代証言者のオーラル情報＝メディアの多様性）。
④ 本時の学習の振り返りを書く。

授業を開発するにあたって、参照したドイツの事実教授教科書バイエルン州用“Piri”の小単元は「学校の今・昔」である。この小単元は、レアプランの単元 4.2 の「生活世界の変動と継続を自分の経験領域からの事例で描写する」「選択された資料に基づいて、自身の生活における時間的スパンを報告し、それを年表に記録する」を学習目標とする。ここでは、昔と今の教室の写真や、祖父母の世代から現在までを直線的に理解し、世代で異なる主観的時間と人間の時間から時間を把握する。学校生活の規律は世代間で異なるが、学校での生活時間における規律の比較から、変動や継続を捉える歴史性の意識とアイデンティティの意識とモラルの意識を組み合わせて育成するものである。

この授業を歴史意識の基礎を育成するという視点から評価し、生活科における歴史意識の基礎を育成する授業の在り方を究明することを試みた。それにより、以下の６点が明らかになった。

第１に、生活科の１時間の授業において直線的理解と周期的理解という時間把握が可能であるという点である。生活科学習指導要領解説や生活科教科書では、各単元で直線的理解と周期的理解のいずれかの時間把握をさせることがめざされていたが、本授業では、導入において２つの時間把握をさせることができた。

第２に、生活科の授業において、人間の時間と主観的時間という時間把握が可能であるという点である。生活科教科書にはみられなかった主観的時間を授業に組み込むとともに、人間の時間と主観的時間を関連づけた時間把握をさせることができた。

第３に、生活科の授業では、複数の時間把握を関連づけた多層的な時間把握が可能であるという点である。第１と第２の点から、生活科学習指導要領解説と生活科教科書では構造的に配列されていなかった多層的な時間把握が本授業ではなされていることが分かる。

第４に、生活科において歴史意識の基礎としての時間意識や歴史性の意識を育成することは可能であるという点である。本授業では、学校の歴史の継続と変動をシンボルツリーと教室環境という具体的事例を通して考察することで、時間意識や歴史性の意識を育成することができている。

第５に、生活科において歴史意識の基礎としてのアイデンティティの意識を育成することが可能であるという点である。本授業では 142 年を可視化する年輪、百年桜や教室環境を通して、学校への所属性を深め、アイデンティティの意識を育成することができている。

第６に、生活科の授業では歴史意識の次元を関連づけて育成することが可能であるという点である。本授業では、時間意識や歴史性の意識は学校の継続と変動から関連づけて育成するとともに、アイデンティティの意識も時間意識や歴史性の意識と関連づけて育成することができている。

以上の６点から、本生活科授業は、歴史意識の基礎として時間意識を育成する授業の一形態を提示することができたと結論づけられる。

最後に、本生活科授業を通して明確となった３点の課題を提示する。

第１は、歴史意識の基礎の育成におけるメディアの有効性の検証である。本授業では、ワークシートの２つの設問において、根拠をもって回答することを児童に求めた。設問１の場合では、「写真」が 12 人と最も多く、今と昔の小学校の様子や生活を比較させる上では、写真は有効であることが判明した。さらに、絵（学校文集の表紙）やビデオも挙げられており、時間意識やアイデンティティの意識を育むためには、写真・絵、時代証言者のオーラル情報など多様なメディアの利用が有効といえよう。今後、どのようなメディアを通して歴史意識を育成すべきかという問いのもとでメディアの有効性を検証し、考察を深める必要がある。

第２は、歴史意識の基礎の育成における協同での学習の有効性の検証である。ワークシートでの回答の根拠として、メディアではなく、「ともだちのはっぴょう」とした児童が２名おり、授業内の友達との話し合いを通して、児童は学校の変動についての気付きを深めていることがわかった。しかし、１時間の授業では、話し合いの時間が十分にとれなか

ったという問題も挙げられる。歴史意識の基礎の育成におけるクラス内での協同での活動の有効性を検証し、育成を促すための考察をしなくてはならない。

第３は、歴史意識の基礎の育成を可能にするための子どもの理解の質を深める手立てである。児童が回答したワークシートでは、学校の歴史の継続と変動を具体的事例でのみ捉えており、その理解がまだまだ表面的なものにとどまっている。具体的事例から抽象的な時間把握や事例へと子どもの理解を深めることが歴史意識の基礎を育成するために不可欠である。

これら３点の課題は１時間の授業のみで克服可能なものではない。“Piri”における時間学習にみられる２学年段階での段階的な発展や多層的な時間把握や歴史意識の次元を関連づけた歴史意識の育成など、カリキュラム全体を通した検討がなされなくてはならない。また、歴史意識の基礎を育成するという明確な学習目標のもとで、生活科だけでなく、社会科における学習への接続も考慮しなくてはならない。この学習目標を設定した授業を蓄積することが、生活科と社会科、初等段階と中等段階の接続を可能にする方策を提示することになるであろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計３件）

① 原田信之・酒井達哉・宇都宮明子、歴史認識の基礎を育成する生活科授業開発－学校の今と昔に着目して－、名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』、査読無、第 27 号、2017 年、pp.119-142、
https://ncu.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=1702&item_no=1&attribute_id=25&file_no=1
http://id.nii.ac.jp/1124/00001619/

② 宇都宮明子、原田信之、時間意識の育成という観点から捉える初等段階の歴史学習－ドイツ事実教授の教科書における時間学習を通して－、佐賀大学教育学部『佐賀大学教育学部研究論文集』、第 1 集第 2 号、2017 年、pp.33-45、
http://portal.dl.saga-u.ac.jp/bitstream/123456789/122928/1/utsunomiya_201701.pdf

③ 宇都宮明子・原田信之、歴史意識の連続的形成を図る初等・中等接続研究－ドイツ教科書の分析をもとに－、日本教科教育学会『日本教科教育学会誌』、査読有、第 39 巻第 1 号、2016 年、pp.73-83

〔学会発表〕（計２件）

① 酒井達哉・宇都宮明子・原田信之、歴史認識の基礎を育成する生活科授業開発－学校の今と昔に着目して－、日本教科教育学会、2016 年 10 月 22 日、鳴門教育大学（徳島県・鳴門市）

② 宇都宮明子・原田信之、時間学習を通した歴史意識の育成－ドイツ事実教授の教科書分析に基づいて－、日本教科教育学会、2015 年 10 月 25 日、広島大学（広島県・東広島市）

６．研究組織

(1)研究代表者
酒井　達哉（SAKAI, Tatsuya）
武庫川女子大学・文学部教育学科・講師
研究者番号：１０６３８０５０

(2)研究分担者
原田　信之（HARADA, Nobuyuki）
名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・教授
研究者番号：２０３４５７７１

宇都宮　明子（UTSUNOMIYA, Akiko）
佐賀大学・教育学部・准教授
研究者番号：４０６１１５４６